



Tokyo Plastic Kaikan 1F, 2-22-13, Yanagibashi, Taito-ku, Tokyo, 111-0052 Japan

Tel 03-5809-3665

email gallery.yukisis@gmail.com

Gallery YUKI-SIS Opening exhibition

2012年3月17日(土) - 4月2日(月)

日、月、休廊 12:00-19:30 (ただし3/20(祝)、4/2(月)は開廊)

オープニングレセプション 2012年3月17日(土) 17:00~20:00

出品作家(順不同)

新藤杏子、森洋史、川崎広平、湯浅克俊、熊谷聖司、菊池史子、池田鮎美、土ヶ端大介
高木さとこ、Elizabeth Leroy、Michaël Monney、Monika Chlebek、Marc Lacaze

Gallery YUKI-SIS

東京都台東区柳橋 2-22-13 東京プラスチック会館 1F

gallery.yukisis@gmail.com 03-5809-3665

Gallery YUKI-SIS では、2012年3月17日(土) - 4月2日(月)、ギャラリーオープニング記念展を開催いたします。今後 Gallery YUKI-SIS での展覧会や国内外でのアートフェアなどでご紹介する作家たちのグループ展となります。ぜひご高覧、ご紹介いただきたくご案内申し上げます。

Gallery YUKI-SIS の名前の由来は、海外でも覚えてもらいやすい YUKI という名前と、エジプト神話の女神 ISIS をもじった造語です。-SIS は、sister の略や、-症、Secret Intelligence Service (イギリス情報局秘密情報部) などのやや謎めいた意味もあります。

今回、Gallery YUKI-SIS のギャラリースペースとなる浅草橋の東京プラスチック会館は、もともとプラスチック玩具や製品の研究室だった場所です。2つのスペースから成り立つ Gallery YUKI-SIS は、メインスペースでは国内外問わず、意識とクオリティーの高い作家のご紹介をしていきます。サブスペースでは研究室=YUKI-SIS LABO として、今後新人の作家の紹介や、インディペンデントキュレーターなどにもスペースを提供していく予定です。また、展覧会のみならず、ダンス、映像、インスタレーションなどさまざまなイベントを開催する予定です。

アートを通して人と人が出会う、磁場のような存在を目指します。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

Gallery YUKI-SIS ディレクター 寺嶋由起



Sleeping figure 01

270x60mm

水彩

2012

新藤杏子は、1982 年生まれ。

彼女の描くモチーフは、想像上の「いきもの」である。一見かわいらしい子供のように見えるが、小説、マンガ、おとぎ話などの日本のサブカルチャーや、彼女自身の実体験を下に、現代におけるもののあり方、人とのかかわり、混沌とした思考を、真白い紙に水彩で描ききる。下書きなどを一切せず、いっきに描かれる水彩の線は、やさしさと残酷さを持ち備え、見るものにある種の疑似体験を呼び起こすようだ。

シェル賞入選、GEISAI TAIWAN #2 や Young Artist Japan 2011 などでは審査員特別賞を受賞。



お気に入りの場所

45.5×38cm

アルマイトボードにアクリル、ウレタン、
UV 硬化インク

2012

1977 年生まれの森洋史は、現在東京藝術大学の大学院絵画専攻油画技法に在学中。もう一度技術を学びなおしたいという強い思いで再入学する。彼の作品は日本の古典美術と現代表現を融合を目指している。菱田春草や伊藤若冲らの先人がそうであったように、その時代でしか残せない「間のとりかたの美」を意識し、制作に及ぶ。画材にも油彩、アクリル、そして車の塗装でつかわれるウレタンなどを用い、現代の表現方法を模索する。美しく優雅に描かれる画面には、相反するアイロニーと西洋のアトリビュートや擬人像による物語が盛り込まれ、その内面を読み解くおもしろみがある。シェル賞 2010 では本江邦夫審査員奨励賞を受賞。昨年の Young Art Taipei では新潮賞を受賞。

湯浅克俊



木の間より移ろふ月の影を惜しみ
徘徊にさ夜更けにけり / utsuroi #1
740x 570mm
紙に木版水性摺り
2012

1978 年生まれの湯浅克俊は、武蔵野美術大学油絵学科版画専攻卒業後、渡英。2005 年ロイヤルカレッジオブアート（ロンドン）修士課程終了。日本を離れ、浮世絵のイメージがいまだ残る日本の木版画の世界における立ち位置を感じ、現代における木版画の意味を模索し続けている。湯浅は、自らがレンズの役割を担い、写真を感光するように版に彫り刻んでいく。拡大や加工のできない正直な版に、湯浅の視点と手作業によって版画でしかできない光を映しこんでいく。すでに欧米での個展も多く経験、数々の世界的なアートフェアなどに出品。新作では万葉集をキーワードに、より抽象性を高めた作品を発表する。

菊池史子



There are the three trees
210x290 mm
雁皮紙に染料、フォトアクリル
2009

現在、ドイツ・ベルリンで作家活動を続ける菊池史子は、日本大学藝術学部を卒業。版画を専攻していた彼女は撮りためた写真を厳選し、版画で使う雁皮紙にモノタイピングし作品を仕上げている。どこかで見たことがあるような、デジャヴー既視感を起こすような作風は、人の奥底に潜んだ記憶にそっと寄り添い、不思議な気持ちにさせてくれる。時とともに薄れ消え去っていく風景、人の感情、人とのかわり。その一片は世界の一部と繋がっていたはず。菊池の作品を通して、かつていた場所に気持ちをスライドさせてくれる魅力が備わっている。

熊谷聖司



Spring 2011

250x200 mm

type-c print

2011

1966年北海道函館生まれの熊谷聖司は、東京とパリを拠点に制作活動が続けている。今までに写真集を7冊刊行。昨年のParis Photo, Off Prints Art Fairでの発表では、大成功をおさめた。

彼の写真には独特の「色」と「光」がある。2011年3月11日の大震災のあと、日本人の心にも「光」が足りないと感じる彼は、不安が蔓延するこの現代と人々の気持ちのバランスをとるには「うつくしさ」が最も重要なことだと考える。写真を通して、「不安の中にも同時に美しいものが在る」ことを人々に感じさせてくれる。

1994年第十回写真新世紀公募優秀賞（南條史生氏選）『第三回写真新世紀展』にて年間グランプリ受賞。

高木さとこ



ボールあそび

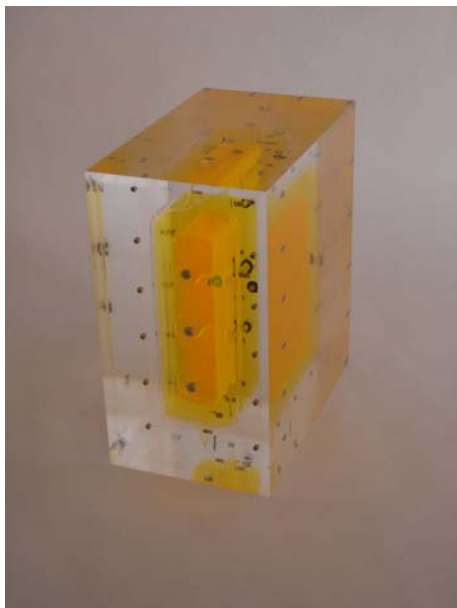
380 x 455 mm

水彩、紙

2012

京都を拠点に制作活動が続ける高木さとこは、壊れたり、使わなくなったアンティークの人形や玩具をモチーフに作品を制作している。そのコレクションは100体以上。彼女の作品には、まるで舞台の役者のように、同じキャラクターが頻繁に登場する。彼らが過ごしてきた時間や持ち主との思い出、そして現代における人間社会の不条理さ、混沌さをテーマに、役者たちは画面というステージで物語を語っていく。最近ではアクリル作品のほか、関西の病院の小児病棟用に水彩作品のシリーズも制作。高木の絵から、子供たちは自由で豊かな空想を思い巡らすに違いない。

川崎広平



無題

100×160×160 mm

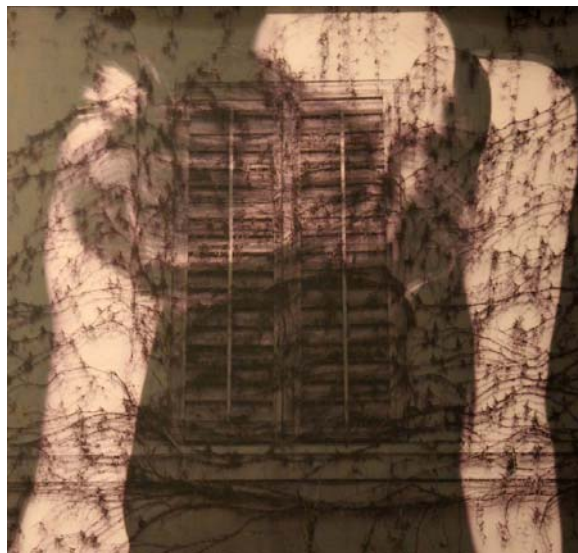
アクリル オイル

2012

1972 年生まれ、武蔵野美術大学彫刻科の修士課程を修了した川崎広平の、制作における意識はとてもユニークである。何かのイメージを、素材を使って作り上げていくというよりも、その素材のもつ「要素、可能性」を組み合わせることで、どのように形成されていくか。それはまるで、生物の細胞と外観の関係や、構造からくる建築物の形、工業製品の内部構造と外部形状の関係などにも似ている。

今川崎が使用している「アクリル」という素材を最大限に生かすことにより、どのような形状が生まれるのか。作品からは、近未来的な宇宙を感じさせるどこか少年の夢を感じさせる。「素材要素」への深い観察力と、「形状の美しさ」への探求は、瞑想状態にも似た空間に静かに繋がっている。

Elizabeth Leroy



Au cœur du temps / Plastic heart

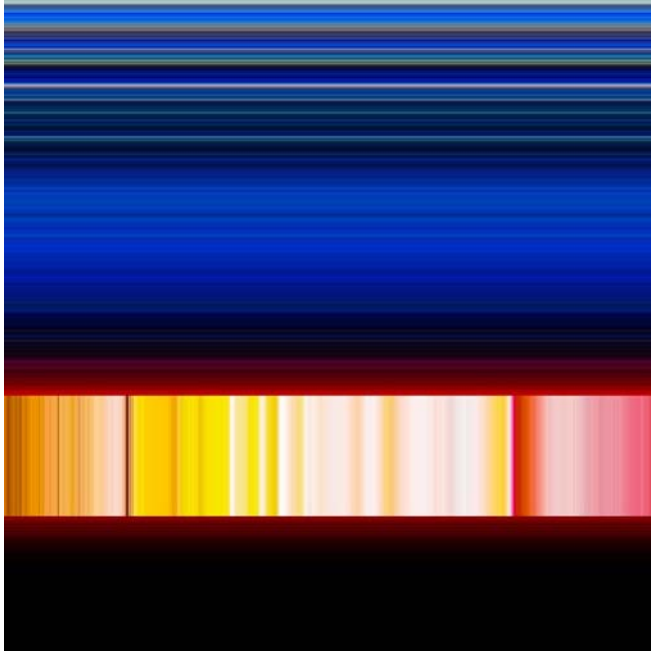
110x110 mm

Ink printing on transparent film, acrylic painting, mirror on Plexiglas

2012

フランスを中心に活動続ける Elizabeth Leroy は、母親も彫刻家という恵まれた芸術環境で育つ。油彩などの活動も続ける中、写真による表現媒体で、ヨーロッパを中心に数々の展覧会やアートフェア、アソシエーションで活躍している。今回日本初の発表となるミラーシリーズでは、彼女の撮りためた何枚の写真と鏡という素材を重ね合わせ、自然や人、人工的のものから構成されるイメージから彼女独自のどこかアンニュイで不思議な世界を作り出すことに成功している。イメージのコラージュともいえるエリザベスの作風からは、内面の美しさ、醜さを鏡写しに感じる。

Michaël Monney



Escape5

455x455 mm

Mixed Media Ed.7

2010

フランス・パリで活動が続ける Michaël Monney は、自らが撮影した「水」の映像をもとに、それをデジタル処理をした作品を制作し続けている。今回日本で初めての紹介となる [Escape] シリーズでは、一枚の作品があたかも窓のように、作品を通して自然や景色、時の気配を感じる作風となっている。美しい色のグラデーションからなりたつ抽象作品は、まるで脳内旅行のような感覚に陥る

Monika Chlebek



Untitled

each 180x130mm

油彩、キャンバス

2011

Monika Chlebek は 1986 年ポーランドのクラクフ生まれ。2011 年にクラクフ美術アカデミーを卒業、すでに Wilhelm Sasnal を生み出した Galeria Zderzak でのデビュー個展では大成功を収めた。モニカの作品の主題は変容が起こりうる状況、すなわち不穏な、潜伏性のある光景である。謎めいたシチュエーション、偶発的な類似点、人が説明することのできない出来事など、観るものを奇妙な世界にひきこんでゆく。作品はリアリズム表現の域にあるが、現実のそれ自体を描くことを意図しているわけではない。もし私たちになじみのあるものをイメージをつかっていると看做しても、それは現実の領域に近づく手段でしかない。夢の中で起こる出来事のようにそっと、さりげなく夢と現実の境界線をゆっくりと不穏な空気で行き来する作品は、3つの睡眠状態—夢遊病、夢、そしてフロイトの自由連想法—のヴェールを解き放つ。



room

455x380 mm

油彩、キャンバス

2012

1990年武蔵野美術大学大学院終了後渡英。1998年、チェルシー美術大学大学院を修了。

視覚的体験と記憶、意味、そしてそこから絵画を手掛け、絵画として描かれた対象に描き手と観る者が多角表現に意味を付与し合い、解釈される可能性を拓けていく、というプロセスにこだわる池田。誰もが目にする風景を主に描いているが、一枚の絵画から一人一人の記憶として留まる、ある意味をもった風景を生み出していく事に成功している。今回の新作のタイトルは「room」。彼の描く世界には、不在の中に静かな気配が感じられる。



Black drop

333x242mm

和紙、パンティーストッキング、糸、白垂

2012

1980年生まれの土ヶ端大介は、2008年東北芸術工科大学修士課程修了。大学では日本画を専攻するかたわら、在学時からストッキングを用いた自由な制作を続け、2008年にはアートアワードトーキョーにてやなぎみわ賞を受賞。黒いストッキングから表現される死の匂い。はかなく朽ちていく生き物の生命の意味。工業製品として大量生産されるストッキングと、相反する和紙、岩絵の具などの天然素材のコントラストは、不気味さと美しさの共存する世界をつくりだしている。



Travel Sketches より Mexico

290×280 mm

水彩、コラージュ

2010

モロッコに生まれ、パリでイラストレーターとして活躍していた Marc Lacaze。世界中を旅し、その国の文化、習慣、歴史、現地での体験などをもとに数々の作品を作り続けてきた。その観察眼はずばぬけたものがあり、フランスの著名旅行誌での連載や映画誌などでそのキャリアを積んできた。最近ではアメリカの有名ブランド「ウィリアムソノマ」や、フランスの香水ゲランとの共同プロジェクトで活躍。親日家としてたびたび日本にも来日。日本の桜をもとにゲランの香水のスペシャルデザイン本もてがける。彼の水彩、コラージュ作品は、彼の暖かい視線と、食欲なまでの探究心が感じられる。、YUKI-SIS での個展を楽しみにしていた Marc Lacaze だが、昨年 8 月メキシコからの旅行後、パリのフラットにて逝去。45 歳の短い生涯を多くのファンに惜しまれ終える。